神道文化学部から官公庁へ

白川 遙野さん

神道文化学部　４年

県庁職員内定

新しい自分を見つけることが出来る学部！

高校生の頃、刀剣に興味を持ち、そこから神社にも興味を抱くようになりました。様々な神社を巡るうちに、神社に奉仕する「神職」という仕事に関わってみたい、と思うようになりました

１・２年次には、神道の視点からの日本の歴史、古事記・日本書紀などの神道古典について学びます。また校史の授業では、本学建学の精神となった国学の学問について学びました。高校まで学ぶ日本史とはちょっと異なった視点からの学修は、母国である日本の歴史と文化を、より深く理解させてくれました。

２・３年次になると、神社の経営の実態などを学ぶことで、この先、神社が生き残っていくために必要なことを考える授業がありました。ここでの学びは、神社の経営ということだけに留まらず、社会人として外部の人と繋がり、皆で一つの物事に取り組むということなどに活かすことが出来ると思いました。

２年次から４年次まで履修する「神社祭祀演習」では、学部の仲間たちと深く関わることが出来ました。実習などの苦労を分かち合うことで、皆と心が通じ合いました。大学生活がますます楽しくなりました。２年次の明治神宮実習も感銘深い経験でした。２日目に行う夜間参拝では、普段参拝者としては入れない大前で、大祓詞を奏上しました。今でも忘れられない思い出です。

就活では、神道文化学部の学生ということが、ユニークなアピールポイントになりました。また神社実習や助勤などの経験を、他の就活生にない「ガクチカ」エピソードとして披露することもできました。氏子の方々・参拝者の方々と接する中で、自ずから社会人としてのマナーやコミュニケーション力を身に付けることが出来たことも、就職活動でのかけがえのない武器となったと思います。

卒業後、四月から公務員（県職員）としてのお仕事が始まります。「地域の核としての神社の役割」について学んだ学部での知識や経験を活かし、地域社会に貢献していきたいと願っています。

日本でただ一つしかないこの学部に入学するのは、いささかの勇気が必要かもしれません。しかし、ここで得られる唯一無二の経験や知識は、神道の分野以外でも、積極的に活かすことができます。自ら学ぶ意欲を持ち、思い切って一歩を踏み出すことができたなら、この学部で、どんな未来も描くことが出来ます。常に視野を広げながら学び続けて下さい。応援しています！

白川さんはこんな学生！

白川さんは、ゼミの単位リポートでは、「祭神論争、千家尊福と出雲について」をテーマとして、先行研究を踏まえた着実な成果を上げています。授業の中では物静かで落ち着いた印象ですが、各地の神社で助勤に励んだり、大学の長期休暇の間には趣味の旅行で、友人たちとともに全国を巡るなど、積極的に学生生活を過ごされていたようです。白川さんの持つ着実性と積極性の両面を生かして、実社会でも活躍してくれることを期待しています。

松本 久史 教授（「神道史学演習Ⅱ」担当）

松本先生はこんな先生！

松本先生は、明るく優しく親しみやすい先生です。ゼミの発表後には読んだ方が良い本について教えて頂いたり、明るく励ましてくれたりと、やる気のでる授業の雰囲気づくりが上手な先生です。先生のお蔭で、３・４年次のゼミをやりきることが出来ました。

白川 遙野 さん（「神道史学演習Ⅱ」受講）

神道文化学部独自の各種講座

神道文化学部では、就職・奉職、および就職・奉職の「その先」を見据え、素養とスキルを高めるための各種講座を開催しています。（無料）

女子学生のための就職セミナー

マナー講座

書道講座

和歌講座

衣紋講座

田んぼ学校

御幣講座

オープンキャンパス（渋谷キャンパス）　8月1日（土）・2日（日）・22日（土）　お問い合わせ：入学課　電話 03-5466-0141

※学年は取材時のものです

神道文化学部の就職力！

齊藤ゆいかさん（神道文化学部学生）制作「Kiminoyo → Hitonoyo」

もっと日本を。もっと世界へ。

國學院大學

神道文化学部から一般企業へ

神崎 桜子さん
神道文化学部　４年

日本航空内定

他大学にはない「学びと経験」が、就活で大きなアピールポイントになりました！

私は社家の出身ではありませんが、幼い頃から家族で神社参拝をするうちに、自然と日本の伝統文化や歴史への興味が芽生えてきました。そうした中で、神道をもっと深く学びたいと思うようになり、神道文化学部への進学を目指すようになったのです。

神職課程の「神社祭祀演習」では、実際に白衣白袴を着用し、祭式作法を学びます。手の位置や足の向き、礼の角度など、所作の一つひとつに、神様への敬意が込められています。それを自ら体現することで、森羅万象あらゆるものに対する敬意や感謝の心を持って日々を過ごせるようになりました。

課外活動では、チアダンスチーム「ドリル競技部SEALS」に所属し、週５日間の練習に励みました。チーム一丸となって、本気でチアダンスと向き合い続けた結果、USA、JCDAという２つの全国大会で、４年間で５回の全国優勝を経験しました。最高の仲間たちと、同じ目標に向かって切磋琢磨したあの歳月は、私にとってかけがえのない宝物です。

就職活動では、IT業界、エアライン業界の面接を経験しました。面接では、面接官の方々が、神道文化学部の学びについて、いつも興味津々の質問をしてくださいました。他の大学にはない学びと経験が、就活においては大きなアピールポイントになることを実感しました。

神道文化学部は、座学だけでなく、神社での実習や雅楽・書道など、実際に体験しながら日本文化を学べる環境が整っています。グローバル化が進む今の時代だからこそ、まず自国である日本の文化や価値観をしっかりと理解することがとても大切だと感じています。

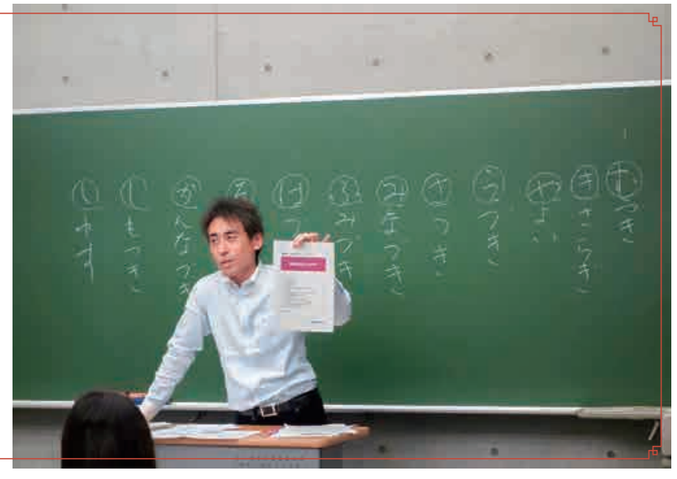
日本文化に興味がある人はもちろん、将来世界に向けて羽ばたきたいと願っている人にとっても、神道文化学部の学修はきっと大きな力になるはずです。

大学の４年間は、人生で本当にかけがえのない月日です。皆さん、今の自分の「好き」や「興味」に素直になりましょう！どうか全力で神道の学びを楽しんでください！

先生からのメッセージ

小林 宣彦教授
「神道学」「神道史学」

「なぜ人間社会に宗教が必要だったのか？」この問いを一緒に考えていきましょう。



世界には、さまざまな人種が存在し、社会を形成しています。その社会には多くの違いがありますが、共通点もあります。その共通点の一つが「宗教」です。皆さん方が世界を旅するとき、その国・その街には、必ず何らかの宗教施設が存在すると思います。宗教の有り様は多種多彩ですが、何故、人間の社会に共通して宗教が必要だったのか、不思議に思いませんか。この問いを一緒に考えていきましょう。

日本にも固有の宗教である「神道」があります。神道で重要なのは「祭祀」です。私は大学教授ですが、宮司として神社で奉仕をしています。口はばったいようですが、神道においては、理論と実践を兼ね備えています。その私の見解ですが、祭祀とは、神を対象に行いますが、人間のために行われるべき儀礼です。そして、神職は神に向き合う「祭祀者」であるだけではなく、人にも向き合える「宗教者」でもあるべきなのです。

大学では、神に向き合う際の儀礼や心がけを教えることはできますが、氏子や崇敬者などへの向き合い方を実践的に教えることは困難です。そのため、神職を志す者には、大学で理論を学び、神社実習などで人への向き合い方を学ぶことで、神だけではなく、人のことも考えられる人間になって欲しいと思います。
「慎みて怠ることなかれ」

神崎さんはこんな学生！

神崎さんは、穏やかな雰囲気の女子学生ですが、チアダンス部に所属して熱心に練習を重ねた体育会系女子です。当初、本人からチアダンス部に所属していることを聞いたときは驚きましたが、２年間ゼミの様子を見ていると、フィジカルとメンタルの強さに感心することが何度もありました。春からは航空会社に就職し、文字通り世界中を飛び回る神崎さんですが、神道文化学部で学んだことを活かして活躍して欲しいと願っています。

小林 宣彦 教授（「神道史学演習Ⅱ」担当）

小林先生はこんな先生！

小林先生は、学生一人ひとりの学びや活動を温かく見守ってくださる先生です。ゼミの発表では、自分では気付けないような視点で、的確なアドバイスをしてくださいます。学業や就職活動に関する悩みにも親身に寄り添い、学生の成長を後押ししてくださる素敵な先生です。

神崎 桜子 さん（「神道史学演習Ⅱ」受講）

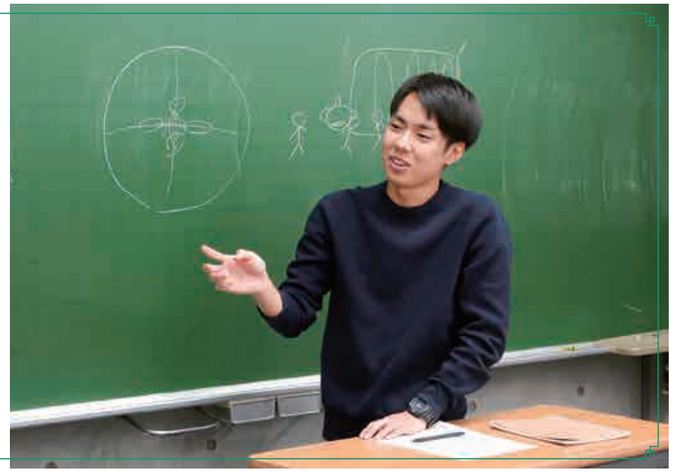
神道文化学部から一般企業へ

上野 陽太郎さん

神道文化学部　４年

東証プライム上場企業内定

自分が本当に好きなことについて学んできたからこそ、面接で生き生きとアピールすることができました



私は社家の出身ではありませんが、祝詞や祭祀、日本の宗教文化に高校生の頃から関心がありました。神社という身近な存在に、長い時間をかけて受け継がれてきた姿勢や文化があることに惹かれ、「専門的に学べる学部があるのなら、挑戦したい」と考えたことが、神道文化学部を志望したきっかけです。

特に関心のあった古典講読や祝詞作文やの講義では、現代語訳だけでは分からない言葉の背景や、神話が持つ世界観に触れることができました。こうした専門的な学びは、日本の宗教文化を深く理解する上で欠かせないものであり、４年間を通して得た知識と経験は、今では自分にとって大きな財産になっています。

学部の魅力の一つは、学生数が多すぎず、先生方との距離が近いことです。講義だけでなく、講義外でも相談しやすい雰囲気があり、学修面でも進路面でも親身に支えていただきました。また、先輩や友人との距離も近く、互いに刺激を受けながら学べる環境でした。少人数だからこそ生まれる一体感は、この学部ならではの楽しさだと思います。

４年間の学びを通して身についたのは、知識以上に「考え、伝える力」だったと思います。授業やレポート、ゼミ活動では、資料を読み、自分なりに考え、文章で表現する機会が多くありました。繰り返し取り組む中で、物事を整理して伝える力や、粘り強く向き合う姿勢が身についたと感じています。これは、社会に出てからも必ず役立つ力だと思います。

就職活動では、神道文化学部の学生であることが大きなセールスポイントになりました。学部名が珍しいため、企業の方にすぐに顔と名前を覚えていただけたことは印象的でした。面接では毎回のように学部について興味を持っていただき、それが自然なアイスブレイクにもなりました。自分が本当に好きなことについて学んできたからこそ、生き生きと話すことができ、その点を評価していただけたと感じています。

将来は、大学で身につけた考える力や伝える力を活かし、社会の中で自分なりの役割を果たしていきたいと考えています。神道文化学部での学びは、その頼もしい土台となるものと信じています。

志願者の皆さん、自分を信じて、自分が好きなことに、とことん向きあってください。多少の不安があっても、自分が面白いと思える道を選び、真剣に取り組めば、その経験は必ず力になります。神道文化学部は、そうした努力をしっかりと支えてくれる場所です。

先生からのメッセージ

柏木 亨介准教授

「民俗学」「文化人類学」

日本列島の多様な祭礼文化を、一緒にリサーチしよう！

私は民俗学的な視点から神社や祭祀について研究しています。例えば、農家の方が田んぼで田の神を祀って豊作を祈願したり、屋敷に氏神様を祀って家の繁栄を祈願したりするといった、民間の祭祀に着目しています。これらは統一された祭式や祭日などはなく、農耕の折り目や生活の節目に際して、先代から伝えられたかたちで、自分たちの手で祭りを行っています。日本列島の多様な自然環境のなかで暮らしてきた人々によって育まれ、伝えられてきた、大切な文化です。

そもそも人が生きていくにあたっては、周囲の自然環境を利用して食物をはじめ何らかの資源を得なくてはなりませんが、それには人々との協働、すなわち社会が必要です。しかし、私たちが豊かな暮らしを送ろうとすればするほど社会は高度化、複雑化し、今では社会を生き抜くための知恵や技術が必要となってしまいました。

人は人との関係に悩み続けることになり、そこから倫理や道徳、宗教といった叡智が生じます。社会の諸課題は人々が作り出したものです。その解決に科学技術を用いるにしても、具体的にいつ、どこに用いればよいかがわからないといけませんから、その根本的な解決には人の思考と行動パターンの正確な把握が必要でしょう。民間祭祀の私的で伝承的な性質は、以上の課題を考えるうえで重要な論点なのです。

私のゼミでは卒業後のキャリアを見据えた指導を行っています。まず、研究書を精読して学術研究としてのものの見方や考え方を把握するとともに、先行研究では見落とされてきた諸問題について議論します。そして、各自が設定した研究テーマに関するデータを実地において収集し、レポートにまとめていきます。つまり前例の知見と課題を把握し、関連のデータを収集し、データ間の相関関係などを分析し、論理的説明を与えます。

大学では「何を」学ぶかも大切ですが、「どのように」学ぶかも同じくらい大切です。一緒に考えていきましょう！

上野君はこんな学生！

上野さんは、他の学生の発表内容や周囲のコメントを自分のこととして受け止め、それを自身の研究にフィードバックさせていました。その優れた観察力と対応力は、就職活動にも活きていたのではないかと思います。今後の活躍を信じて疑いません。

柏木 亨介 准教授（「宗教学演習Ⅱ」担当）

柏木先生はこんな先生！

柏木先生は、民俗学・文化人類学を専門とされていますが、分野にとらわれず幅広い領域に造詣の深い方です。研究者としての専門的な知見に加え、社会との接点を踏まえた視点から、将来やキャリアを見据えた指導をしてくださる点も、柏木先生の大きな魅力だと感じています。学生の相談にも真摯に向き合ってくださるとても素敵な先生です。

上野 陽太郎 さん（「宗教学演習Ⅱ」受講）

神道文化学部から一般企業へ

鈴木 花穂さん
神道文化学部　４年

東証プライム上場企業内定

「他の大学にはないユニークな学び」だからこそ、そこに自分なりの「意味」を見出すことができれば、それが大きな「強み」になるのだと思います。

高校生の頃、私は日常の中に当たり前のように存在している「宗教」というものに、漠然とした興味を抱いていました。「人はなぜ神に祈るのか」「人々なぜ信仰を共にするのか」「人々は生や死とどのように向き合ってきたのか…」

その答えを探すために、神道文化学部への進学を決意したのです。

入学後は、この学部ならではの学びに積極的に挑戦しました。神職資格取得のコースで必修となる神社での実習や助勤は、社家ではない私にとって、神道への理解を深めるかけがえのない経験となりました。ご社頭でのご奉仕を通じて、神道が人々の心や暮らしに根付いていることを実感しました。実際の現場に立つことで得られる気づきの多さを知る日々でした。

就職活動においても、神道文化学部という学部名は大きなアピールになりました。面接では、必ずと言っていいほど、面接官の方々から神道を巡る興味津々のお尋ねをいただきました。

もちろん、その学部名が強みになるかどうかは、そこで学んだ内容や経験を、どれだけ自分のものとして血肉化し、それを自分の言葉で表現できるかにかかっています。

他の大学にはないユニークな学びだからこそ、そこに主体的に向き合い、自分なりの「意味」を見出すことができれば、それが自ら大きな強みになるのだと思います。

私は神道文化学部での学修や経験を、自分の強みに繋げることができました。この学部を選んで本当に良かったと感じています。

これから進学を考える皆さんには、恐れず怯まず、さまざまなことにチャレンジしてほしいと思います。自分の「好き」を信じて、自分なりの一歩を踏み出すことで、大学生活は想像以上に豊かなものになります。神道文化学部には、皆さんの挑戦を支え、皆さんの背中を押してくれる学びと環境があります。四年間の大学生活で、この学部ならではの学びと経験を、どうか全力で楽しんでください!!!

先生からのメッセージ

加藤 久子准教授
「宗教学」「宗教社会学」

個性的な研究テーマを期待しています。

私は2025年度に神道文化学部に着任しましたが、2012年から８年間、本学日本文化研究所で研究員をしていましたので國學院大學との関係は比較的長く続いています。その前にはポーランドにある日本大使館で２年間、専門調査員として勤務していたのですが、その大部分の期間を後に掌典長となられる楠本祐一大使の下で過ごしました。

楠本大使について印象に残っているのは、大きな催事が終わった後、屋外にいた警備や配車の担当、事務所で待機していた医師や通信担当など、縁の下でイベントを支えたスタッフの名前を一人一人挙げながらねぎらわれる姿です。

このように、私はどちらかと言えば社会科学分野の環境で過ごしてきました。専門は宗教社会学ですが、社会学の社会変動論という分野に近い関心を持っています。社会制度や社会構造がいつ、なぜ、どのように変化したかを、長いスパンで把握しようとする分野です。

主に関心を持っているのは政教関係や公私の区分の変化ですが、そのほか都市化（都市への人口移動）に伴う住環境、家族関係、教育・雇用の変化が宗教にどのような影響を与えたかという観点からも研究をおこなっています。

私は「宗教」を教団や特定の宗教への信仰心だけでなく、死生観や生命倫理、人生観、人間観（動物観）、身体観、冠婚葬祭、国家儀礼など、宗教に下支えされている（ように思われる）習俗、社会慣習、感情・認識などを含む、広義のものとして捉えています。

また本学に着任する前は、社会学部で宗教社会学だけでなく、文化社会学や国際社会学も担当していたので、卒論でも観光や音楽、ファッション、文化輸出やファンコミュニティ、結婚観、昭和レトロ、フードロスなど、同時代の文化を対象とするものを多く指導してきました（もちろん、山岳信仰、社寺の防犯、輪廻転生アニメ、ホラー映画と宗教的タブーなど、宗教にかかわりのあるテーマも）。

皆さん、ぜひ自由な発想で、個性的な研究テーマを着想して欲しいと思います。

鈴木さんはこんな学生！

鈴木さんは異類婚という、動物や鳥、カエルなどと人間が結婚する民話・伝承について研究しています。卒論もコツコツと堅実に書き進めていて実に頼もしいのですが、なかでも、物語を類型化したり、外国の民話と比較したり、試行錯誤を重ねながら自ら道を切り開いていけるところがとても素晴らしいと思います。さらに、その試行錯誤を（おそらく）楽しめているところがとても素敵！これからの人生でも、さまざまな壁をそんなふうに乗り越えていくものと期待しています。

加藤 久子 准教授（「宗教学演習Ⅱ」担当）

加藤先生はこんな先生！

加藤先生は、学生一人ひとりをよく見てくださる先生です。一人ひとりの歩むスピードや考え方を大切にしながら、学生の研究分野に合った先行研究、専門の先生をお教え下さいます。私たちの興味や関心の幅を広げ、自分の研究テーマを主体的に選び取れるよう、優しく導いてくださいました。

鈴木 花穂 さん（「宗教学演習Ⅱ」受講）